慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	2011年度高山市丹生川地域活性化に関する調査活動についての報告
Sub Title	A fieldwork report at Nyu-gawa district of Takayama for regional development in 1991–1992
Author	長田, 進(Osada, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学 (The Hiyoshi review of the social sciences). No.23 (2012.) ,p.37- 50
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10425830-20130331-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2011年度高山市丹生川地域活性化に関する調査活動についての報告

長　田　　進

1．はじめに

現在，地域を活性化する活動として「まちづくり」という言葉を耳にする機会は多い。これは，地域住民が主体となって，生活の場である地域に愛着を持ち，その地域をより魅力的にするための活動全体を指すものである。まちづくり活動で取り扱う内容は，都市計画として多くの人々が連想する地域のインフラ整備などのハード面にとどまらず，雇用などに関する産業計画や，地域を盛り上げるイベントの開催，および生活に直結した地域の公共スペースに対する要望の提出などのソフト面を含む幅広い領域を網羅している[1)]。この種の活動の特徴としては，いわゆる都市計画家などの専門家以外の一般の生活者の意見を広く取り入れるために，多くはワークショップなど用いて，人々の意見を熟成させるための試みを組み合わせて設定されている。

まちづくり活動について，現在大きく注目される視点の一つに観光振興との密接な関係に着目した活動がある。従来の観光では，多くの場合は旅行客が集まる都市部から観光地に出かけていき，そこで単純に名所を訪ねる視察的な内容が中心となる，発地点が中心となっていた。このような旅行の場合，旅行先の場所での活動はあらかじめ決まったものとなりがちであり，旅先の地域からの積極的な情報発信がなされることは決して多くはない。

1）「まちづくり」は，増田（1954）にて「町づくり」として記述されたことに起源を求められるが，現在ではひらがなで表記されることが一般的になっている。これは「まち」には「町」や「街」をあてることが可能であるし，「つくり」の部分はやはり「作り」「造り」「創り」などの文字をあてることが可能であり，イメージが広がるということからひらがな表記が一般的となった。それに加えて，多くの人々を巻き込むために堅苦しい印象を与えないためでもある。

これに対して，近年では着地型観光の考え方が注目を集めている。これは，旅先となる地域自らが主体となって企画立案を行い，その内容について興味を持つ客を現地で集めて展開する，旅先の地域が主導となる観光の在り方である。これは，地域の魅力を大いに観光客に伝えて，その地に滞在を決定させる効果が強く働くといえるが，一方で地域の情報発信力が重要な能力として要求される。これは，地域の力を発揮させるという点で単に観光にとどまらず，地域住民が主体となって行動するという「まちづくり」の本来の意味と極めて親和性が高いという点で注目を集めている。

また，観光開発は地域経済の活性化の視点からも注目を集めている。現代日本の産業構成から考えると，現在の日本は第三次産業に従事する人々が全体の60％以上を占めている。しかしながら，地域経済の場においては，地域経済の活性化に対する方策としては，依然として企業誘致などが中心となっている。しかしながら，現代の日本社会では「産業の空洞化」という言葉に代表されるように，製造業は日本を離れる傾向にある。この点からも地域経済の活性化の問題に対して新しい視点から取り組みを行う必要がある。

この点で地域住民が自分たちの地域が持つ魅力について戦略的に行動する重要性は増している。この社会背景をもとに，地域が持つ魅力を地域資源として積極的に活用して観光まちづくりを行う地域も出てきている。観光業の売り込みを考えることは，地域の魅力を発見することであり，観光とまちづくりの関係は，地域住民の地域に対する魅力を確認することにつながる。このことは，地域をよりよくする運動につながる点で，コミュニティのあり方を考えるまちづくり活動につながることを意味する点で，重要である。

まちづくり活動を行う時に，大学生が活動する機会が多くみられる。大学と地域の関係については，すでに文部科学省（2003）で調査報告がなされているが，大学生が地域で活動することについては，若者の積極的な関与ということ地域住民からも評価が高く，また，大学からもすぐに行える地域連携の在り方としても評価されている活動である。単に地位と大学の思惑が一致する活動としてではなく，まちづくり活動についても，地域の魅力を引き出す触媒的な視点を提供する重要な役割としての，「よそ者，若者，ばか者」の視点を提供することにつながるものである。それに加えて，教育としても大学から見ると，大学生が地域調査を行うことは，学内で学問的な技術を身に付けるとして学ぶだけでなく，その実践を行う場としてとらえられる点において

も貴重な体験をすることになる。

本稿は，2011年度に行った岐阜県高山市丹生川地域における現地調査に関わった学生の活動を中心としたまちづくり活動の事例を記録することを目的としている。したがって本稿は以下の構成をとっている。まず，高山市の丹生川地域の簡単な説明を行った上で，その地域が抱える問題意識について紹介する。その後に，調査をするにあたっての視点を示した上で，実際に行った調査内容について記述する。

2．対象地域となる高山市丹生川地域に関する基本的情報

今回の調査対象は岐阜県北部に位置する高山市のうち，高山市北部に位置する丹生川地域を活動の舞台として行った[2)]。この地域は，平成15年までは岐阜県大野郡丹生川村として独立した地方自治体だったが，平成16年に旧来の高山市と合併をして現在の名称となっている。

丹生川地域は高山市の中心市街地と隣接した地域であり，地形としては水路を中心として，地域は東西に長く広がっている。ここの地区では代表的な幹線道路として，平湯街道が近くを走っていることとなる。この集落構造は寺社の分布についても同様のことが言え，東西に延びる集落に沿って展開している，この東西に細長い構造からコミュニティは東西に分かれている（図１参照）。

丹生川地域は「雪・花・サラダの里　にゅうかわ」というキャッチフレーズを掲げている。これは，観光，景観，農業という地域の特徴をまとめている。この地域は高山市の中心市街地から遠くない有利さと，スキー場や乗鞍岳，および鍾乳洞など自然地形に関係して観光資源に恵まれている。また，農業についても，トマトやホウレンソウなどの野菜を栽培し，関東と関西の両地方に出荷するなどの強みを持っている。また，近年では地域野菜として宿儺かぼちゃを積極的に売り込みを続けている。

また，この地域は，街道沿いに位置していることもあり，景観に配慮した事業に力を入れている。例として，道路沿いの花壇を整備することで街道沿いに花が咲き誇っている景観を整備している。

丹生川地域内の集落は，北方，法力，大谷，坊方，町方地区と呼ばれている地区を

2）　現在の高山市は，平成16年の合併により市域は大幅に拡大している。市域は東西約80km，南北約55kmにわたっており，その面積は大阪府の面積より大きい。

図１：高山市丹生川地域周辺地図（高山市HPより）

含んでいる。これらの地区は，良質な木材を用いた町家の意匠を取り入れた邸宅が現在も多くみられている。その代表的なものは江戸時代から存続している荒川家があげられる。荒川家は天正年間から続くという旧家であり，江戸中期に建てられた主屋と土蔵は現在では国の重要文化財に指定されている。現在は博物館として使用されており，内部には歴史的な書状や，丹生川地域の民具などを展示している。

以上が地域の概要であるが，丹生川支所（2012）によると，丹生川地域の課題として次にあげる点がある。第一の課題は，地域経済を支える観光客の減少傾向についてのものである。これは丹生川地域観光施設述べ入込者数を見てみると，平成13年度には約96万３千人だったのに対して，平成23年には53万４千人へと大きく減少している。これは，スキー場を訪れる観光客数の減少が（平成13年度の16万２千人から平成23年度の11万９千人へ）や，乗鞍岳推計入込者数が同様に約42万人から18万人へと減少していることがある。また，地域の民宿についても37軒あったものが29件へと減少している。この変化は，従来の観光施設に頼るだけで不十分なことを意味しており，新しい観光資源を開発する必要があることをうかがわせる。

二番目の課題とは，人口構造の変化に見る集落構造の変化に対する対応の必要性である。平成12年の国勢調査に基づくとこの地域には4,719人の人口を記録していたのだが，平成22年には4,548人と減少傾向にある。そして，高齢化率についての指標を見ると，平成12年の24.1％だったものが平成22人には27.3％へと上昇している。これらの人口構造の変化を考慮しつつ地域の将来性に対して計画を立案する必要がある。

三点目の課題としては，近年では地域の連帯感が薄れる傾向についてのものである。これは，現代人の生活スタイルが多様化に向かうと同時に，市町村合併などを通じて地域全体での共同作業を行う機会が減少したことなどに関係していると考えられる。このような市町村合併などを通じた地域の特色が薄れつつある傾向とともに，地域独自の歴史や伝統文化の伝承が困難になることを意識する必要がある。そのためにも地域の情報発信力を高め，住民の活動が活発になることが望まれるが，そのような状況を生み出すために行政が行うための適切な支援体制の確立に向けて自治体も模索している。

3．丹生川地域の現在の取り組みについて

高山市では平成22年度から３年計画で地域再発見事業を展開している。これは，高山市が市町村合併を行う前の地域がそれぞれの強みを意識するための事業として位置づけており，丹生川地域の場合は以下の方針を掲げて現在取り組みを行っている。

丹生川地域の基本方針は，住民が地域の良さを自ら認識して郷土愛を醸成できるように，地域資源を積極的に守る活動への関心をいかに高めるための方策こそ重要だと位置づけている。ここでは，地域資源を守る活動を行うことと地域資源を活用する活動の両方を行うことを目指している。すなわち地域資源を活かした観光活動を行うと同時にその活動が地域資源を保全する方向性を担うものと考えて活用することとなる。

そのために，丹生川地域は集落が存在する北方・法力地区を中心として，観光モデルを作成するという基本方針を策定した。これは，平成13年度の「特色ある地域づくり」事業のモデル地区となっていた田園地域であり，すでに一度地域資源について確認したことがあることが重要である。そして，今回は，北方・法力の景観重点地区を中心として，大谷・坊方・町方の地区まで含む地区を対象とすることになった。そして，この地区を中心として，地位住民との交流活動を着地型観光の手法をもとに展開

することを目標と設定した[3)]。ここでは，農業が盛んな地区において，体験型の着地型観光を実施可能にする団体を設立することを通じて，地域の情報発信力を高めるという目標を達成するものである。

図２：調査の対象地区となる丹生川地域内の５地区（Google Map を使用して作成）

このような大方針のもと，平成22年度からの３年間の事業は次の流れを想定して進めることとなった。最初の年である平成22年度は，平成13年度の丹生川村時代に行った「特色ある地域づくり」事業の成果をもとにして，丹生川地区の魅力や資源の掘り起こすことを活動の中心とした。ここでは，かつての調査から地元の魅力や地域資源の掘り出しと再認識を行い，地元の観光事業者による意見交換会などを開催することで現在の地域の魅力を発見することと地域住民が行うワークショップを通じて地域住民に意識させることが活動の中心となる。

平成23年度は，平成22年度の活動をもとに，地域資源を用いた観光プランを設定して，そのプランに対して外部からの評価を受けて方向性を定める年度だと位置づけた。ここでは，地域からの情報発信力をいかに高めるかという点に対して地域資源となる旧跡などについてルートを設定し，そのルートを回るために自転車を用いた観光プランを提案することに対して検証を行うとした。

3）　着地型観光とは，地域住民が主体となって観光資源を発掘，プログラムを行い，旅行商品としてマーケット発信・集客を行う観光事業の一連の取組を示すものとしている（尾家・金井2008）。従来型の観光の場合はその多くがいわゆる名所を回ることや宴会などがその目的尾なることが多いのに対して，着地型観光の場合は，地域が計画立案を行い実行するために，体験・交流・学習が目的になることが多い。

最終年度となる平成24年度では，平成23年度の調査結果をもとに地域からの情報発信としての旅行プランを試験的に実行し，その客からの反応などをもとにすることと，地元住民が主体となって活動するための運営母体となる例えばNPO法人の設立などを念頭に置いた活動を行うことを通じて，ソフト面での充実を図ることを目指している。

4．学生が観光まちづくり活動に関する調査を行う意義

今回，私が今回の調査に関係するきっかけは，2006年以降の毎年に，岐阜県高山市に学生と地域活性化について考える場所として合宿を行ってきたことにある。文部科学省（2003）によると，大学と地域連携の場において，地域住民からの要望としての調査が行われている。この調査で確認された点の一つとして，学生が地域に出ていき活動することに対する評価であった。今回の調査において，高山市側からの依頼としては，単なる調査にとどまらず，多くの大学生の参加を求めるものであった。

また教育の現場においても，実地調査の手法を指導する機会を持つことは重要である。最初に指摘しておくことは，地理学，人類学，社会学をはじめとする学問分野については実地調査がその研究手法として身に付ける技術として存在している。二点目に，上記の学問分野でなくとも，資料の入手性の面で大学外部の人々と接触する機会などを持つことがあり，その点で実地調査などの経験をすることで，大学３年生以降の研究などを充実させるために必要な措置となる[4)]。三点目は，地域からの要請に対応するためにも，大学ならではの学術的な方法論に裏打ちされた調査と学生を交えた新鮮な意見を必要としたということがあげられる。

これらは，文部科学省（2003）の調査でも指摘されており，また，まちづくり活動などで重視される，いわゆる「よそ者，若者，ばか者」という第三者としての新鮮な視線をもとに地域を眺め，新しい提案を行うというものである。この点においては，地域が大学に対して期待する「地域の問題に対して解決に向けた提案を行う」機能を実際に行い，なおかつ，教育機関としての大学の特性を活かした取り組みを示すことになる。

地域調査を行う時には，可能な限り数多く足を運ぶことが重要となるが，今回の調

4）　実際に慶應義塾大学教養研究センターでは，2011年度と2012年度については，フィールドワーク実習の時間を設定し，全学部で興味を持った学生に対して履修可能な状態にしておいた。

査では，大学の所在地から遠く離れた土地の調査ということもあって，調査の実施回数などに大きな制約がある。しかしながら，地域ですでに行われた調査に基づくプランが存在し，そのプランに対する検証を行うことが今回実行することであるため，地域との連携を密にすることでその制約を補うことができるよう留意することになった。

5．調査の内容とスケジュール

最初の段階として，2011年８月に調査の目的などについてその状況を理解するためにも，筆者が一人で高山市丹生川支所の担当者から説明を受けた。この時に丹生川地区の目指すのは観光地として着地型観光でのあり方を検討することであることを確認した。そのために，学生による着地型観光を実施するための調査の実行を期待されていることを確認した。

対象地域は，2011年度に作成した地域資源のリストをもとに，街道沿いに広がる景観，古民家，石仏，史跡[5)]を中心と据えたコースを想定しており，そのルートに対する評価することを期待されている。対象地域は公共交通網が大いに整備されているとは言い難く，交通手段を確保する必要がある。今回は，自転車を使用すること対する実現可能性について検証することを期待されている。

８月の打ち合わせの時に，丹生川地区全域についてイメージを明確にするために，今回の調査対象地域から外れるが知っておいた方が良い千光寺（飛騨千光寺）や乗鞍スカイラインなどへも視察を行い，丹生川地域の全体像をつかむことに努めた。そして，最後に今回の調査における地区内に所在する石仏などの位置関係を確認した。

学生が参加した最初の調査は，９月19日から21日にかけて実行した。この調査には学生20人が参加した。当初のスケジュールでは，初日に地域住民とのミーティングを行うことで地域住民と学生の顔合わせと今後の協力関係を築くことを目的としたものである。その後，２日目には対象地域の観光資源として期待される地域資源について，地域の方によるガイドを受けながら一通り視察をして位置関係などを確認する。そして最終日に自分たちだけで自転車でルートを一周してその内容を検証することを計画していた。しかしながら，調査当日は台風に見舞われたため，２日目以降はかろうじ

5）　大原騒動とは，江戸時代の1771年から1788年にかけて飛騨国で発生した，大規模な一揆であり，丹生川地区関係者の墓や記念碑が存在している。

て地域資源について説明を受けながら，徒歩で回るにとどまり，実際に詳細な調査・検証を実行できなかった。

9月の調査では悪天候のために調査が十分にできなかったため，11月に行った2回目の調査が持つ意味を非常に重要なものとなった。この調査は11月22日から24日にかけて決行した。ここでは，前回より少人数となる6名の学生が参加した。この時は，気候にも恵まれたため，実際に自転車を使って対象地区について全面的に巡回した。この時の調査から判明したことは，以下の意見が判明した。

まず，天候に恵まれたこともあり，参加学生からの自然観光資源についての評価は高いものとなった。特に乗鞍などを眺望できる遠景をもとに古民家が立ち並ぶ景観については評価が高かった。二番目に地域の人々の親切さなどに対する評価も高かった。これは，幾人かが地域を巡回する中で路上にて地域の農家の方と話す機会を持ったのだが，人々の生活ぶりについて話を聞く機会を持ち，コミュニケーションをとることについて人々は親切であり，そのことに対して満足度が高いものとなった。

その一方で，自転車を使って地域を観光することについては，厳しい評価を与えることとなった。これは，次にあげる視点から指摘された。まず，丹生川地域を自転車で回ることについて地形の面からのものであった。対象地域は一般の人々が自転車を利用するには起伏が大きい地形であった。その結局，変速機付の電動式の自転車を利用する必要があるという評価になった。また若い世代でないと難しいのではないかという声もあった。

また，道路整備状況などのインフラなど地域のハード面に着目した評価も行った。高山市は多くの日本の地方同様，自動車中心に道路整備が行われている。このため，自転車を用いる時の道路について体験した。この点ではいくつか注意する必要があった。まず，車道を自転車がそのまま走行するには，幹線道路を走行する車両の種類と速度との関係から，自動車は大型の車が速い速度で運転されていることが多いため，観光者が自転車で周遊するのは危険性が高いという意見が上がった。これは，自転車道路として既存の歩道を乗り入れ可能にすることを考慮するにも，道路歩道の途中でなくなる事例なども見受けられるため状況は不十分であると判断された。

その他，観光客が自転車を利用するに当たっては，標識等の整備が必要だと判断された。これは，どこに何があるのかについて，初めて訪れた人にとっては不親切であるという点について意見が出た。少なくとも，史跡マップなどの配布が必要となるで

あろうが，やはり初めて訪れる人にとって，親切さに欠けるという意見は調査を行った者の間で一致した。

その他，トイレなどの整備の必要性も話題に出たが，トイレを設置する費用などを考えるのならば，住民との間で取り決めを行い，集落内の一般住宅などのうち，声をかけたら利用可能になる場所を地図に記載していくことで対応できないかという意見が出た。これは，地域住民とのコミュニケーションの機会を提供するのではないかという意見が出たのである。

以上の意見を集約して自転車を用いた観光については以下の通りとなった。まず，単純に自転車を提供し，地域資源を示した地図を配布して旅行者に地域を自由に巡回させるプランでは丹生川地域に観光客を招き入れるには不十分だと結論付けた。

ただし，地域住民と交流する機会を用意した体験を組み合わせた形態をとるならば可能性は十分にあるという意見を持った。地域の方と交流することで，標識等の整備が進んでいなくとも却って説明を直接聞く機会を持つことで，地域での体験を深めることができるのではないかと考えたからである。ただ，景観を楽しむというだけでは，観光客の目を引き付けることには不十分であり，現在注目される着地型観光の視点が重要となるのである。今回の丹生川地域のまちづくり活動についても，従来の乗鞍スカイラインやスキー場などを用いた観光まちづくりではなく，地域住民の地域に対する愛着を引き立てるための試みであり，すでに存在する地域資源の活用が進むことを主体としており，新たな大規模投資を行う必要がないこと，と地域住民の積極的な参加が求められており，その意味でも地域の愛着心を高めてまちづくりは住民主体となって展開するものである，という意識を裏付けるものとなる。

もちろん，現状の問題点としては以下の点について言及がなされた。すなわち地域住民の不安な点としては，地域住民主体の住民にとって当たり前の内容しか含まないプランが果たして外からの客に対して魅力的なものとして認知されるのか，そして，それをどのように展開していくのかについてのプラン作りが必要となるという点にある[6)]。

この点について調査参加者からは，景観などについて魅力があることを認めつつ，

6) 例えば，地域の冬の民芸物である雪花について説明を受けた時にそれを実際に作るワークショップを開催してはどうかと提案したところ，それでいいのだろうか，と地域住民から意外に思ったという意見が出てきた。

表示などの面で地域の説明が不十分であり，史跡を見てもその意味が理解しにくいということを指摘していた。また地域資源について，地域外の人々に説明を行うことのできる人々が非常に限定されることも問題として指摘された。この点で，地域住民の間での説明のノウハウなどを高める必要があることを確認した。

以上の反省をもとに調査を行った学生たちを中心にして観光プランを作成した。ここでは，主に丹生川の史跡を巡るプランを第一に設定することにした。その趣旨を２月に丹生川支所にて中間報告を行った。この中間報告を行った時に意見交換から，地域住民からはサイクリングにとらわれる必要はないからもう少し自由なプランを考えればよいのではないかと提案を受けてもう一度考えることになった。そこで複数のプランを提案することとなった。

３月には自転車を用いることを中心にしたプランを最初に提案した。このプランは，着地型観光の中でも，エコツーリズムの考え方を用いた観光プランを提案することにしたのである。エコツーリズムとは，自然環境や歴史文化を対象とし，それらを体験し，学ぶとともに，対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかたであり，これは，自分たちの地域の強みを再確認することにつながるものである（環境省 HP)。丹生川地域には豊かな自然資源を抱えており，これを活用しない手はないということがその基本姿勢となった。この時に，地域の案内人を付けないと旅行プランとして成立しにくいのではないか，という意見も出たが，この点については指摘することにとどめておいて，まずは参加者が堪能した自然を楽しむプランを前面に押し出すことにプレゼンテーションでは，強調することに方針を統一した。

中心となる観光プランは「丹生川ファミリーサイクリングプラン」と銘打ったものである。これは，２月の時点で基本的なプランが出来上がったものを発展させたものであり，家族で来た観光客を対象としている。ここでは，対象地域を午前の部と午後の部の２つに分けた上で，丹生川地域を一日かけて巡回するプランとなった。これは，高山市丹生川支所を起点としており，午前中は荒川家を中心とした古民家の並ぶ様子を堪能してもらうことが狙いとなっている。午後は，対象地域のすぐ外にある飛騨エアパークまでサイクリングを堪能してもらい，エアパークから北アルプスの景観を楽しむこととするのである。その時には，地元の名産品を使った食を堪能してもらうことを提案した。

その他の案としては，古民家で雪を経験することを掲げたプランを提案した。これ

は，当初のサイクリングを整備することを通じて丹生川地域を体験するというコンセプトを離れて，一見地元住民からすると観光客には魅力的に見えないかもしれないが，雪深い地域の生活を体験してもらうということは，雪での経験を求める人々にとっては魅力を感じる部分がある。そして，丹生川地区の農家が冬季に作る雪花などを体験することは重要でないか，と考えたことに起因する。それに加えて，雪かきなどの作業は若者にとっても体力を使う作業であり，これらの活動をいわば一日ボランティア的な活動にデザインすることで地域にとってもメリットがあるのではないか，と考え，第２のプランとして提案した。これは，地域にとって負の要素だと思われる事柄は案外他者にとっては魅力的なものとしてとらえられることがあることを念頭に置いたものである。

さらに，観光は一度経験をすれば十分というものでなく，地域に対するファンを作り，リピーターとして再度訪れてもらうような仕組みを作ることが重要である。この点を強調する意味で改めて，乗鞍岳などの自然を堪能するプランを提案した。ここでは，山岳地帯を近くに控える丹生川の特性についても写真コンテストを開催することで，人々の注目を数ヶ月にわたって引き付ける工夫を行うことも行ってはどうか，というプランを提案した。

これらのプランの提案については，実際に地域住民の前で報告を行うことで，大学生から見た丹生川地区の魅力と地域に対する大規模な投資でなく，身近なことに取り組むことで，地域で生活する人々の利便性を高めることが，すなわち，外から訪れる人々にとっても魅力的なものになるということを示すよう，注意を促すものとなった[7)]。

以上が報告内容として丹生川支所に提出されたのだが，学生が何度も現地に足を運び調査を行ったものを発表することで丹生川地域の方にも好感を持っていただいた。以上が2011年度の全活動である。

7）その他，２月の意見交換会の時点ではカップル向けのプランを提案できないかという希望を受けたが，11月の調査担当者にその視点が欠けており，サイクリングロードを成立させるのに必要な技術的な視点からの検証にとどまってしまったため，プランを提示することができなかった。しかしながら，女性から地域がどのように受け止められたかについては，補足意見として景観の美しさなどは十分魅力的であるという意見を３月の報告会では紹介した。

6．終わりに

今回は，2011年度に担当授業に参加した有志学生と共に，高山市丹生川地域活性化に関する調査で行った活動についてその概要をまとめたものである。

現在の大学において，地域連携や地域貢献に関する活動について注目を集めると同時に，その重要性は増していく傾向にあると思われる。今回の活動については，学生の側から見て，その教育的効果に加えて体験することの重要性を実感したことと，および，大学での技術習得的授業の実際的価値を高めることにつながったとして意義を確認した。

今後は以上の内容を日常の授業に組み入れる方法について検討を加えていくことになるだろう。なお，平成24年度の丹生川地域の事業としては，平成23年度の報告を受けて，体験型の旅行プランを実験的に立案し，パイロットツアーの形で検証しており，そのツアーを立案・運営する母体となるNPO法人の設立に向けて活動していると聞く。まちづくり活動は持続的で終わりのない活動であり，このような試みが継続して行われることを期待するものであるとして，本稿を締めくくることとする。

7．謝辞

今回の活動にあたって，高山市丹生川支所には多方面にわたり便宜を図ってもらうことになった。また，学生に調査経験を積極的に取り入れる授業を行うにあたって，文部科学省の大学教育・学生支援推進事業　大学教育推進プログラムとして採択された慶應義塾大学教養研究センターによる「身体知教育を通して行う教養言語力育成」による支援を受けている。これらの関係者には大いに感謝する次第である。

8．参考文献

1．尾家建生，金井万造（編）(2008）これでわかる！ 着地型観光―地域が主役のツーリズム，学芸出版社
2．東京大学先端科学技術研究センター　西村研究室他（2010）高山市文化財総合的把握基礎調査および高山市歴史文化基本構想策定基礎調査報告書，東京大学
3．高山市（2012）高山市丹生川地域地域再発見事業報告書

4．高山市丹生川支所（2012）乗鞍の里　魅力再発見事業“地域力の向上をめざして”，報告資料